

近郊都市川越市の地理学的考察

——工業を中心として——

荒木美智子

川越市は、城下町から発達し、江戸時代、明治時代から現在に至るまで商業が栄えてきた旧川越市と、それを核として、周辺の農業地帯であった芳野・古谷・南古谷・高階・福原・大東・霞が関・名細・山田村の旧9か村が、昭和30年に合併して成立した都市である。また、川越市は、埼玉県中南部にあり、都心から40km圏に位置している。そして、川越市は、このように都心に近接することから、戦後、特に昭和30年代から工業化が進み、また、特に昭和40年代から東京方面への通勤者のベッドタウンとなって著しい人口増加がおこった。そして、昭和30年の合併当時には農村的性格の強い都市であったのが、現在のような首都圏の住宅都市、商工業中心の都市へと変貌した。本研究の目的は、こうした戦後の川越市の変化を、工業を中心として考察することにある。

川越市は、昭和30年代以降、急速に工業化が進んだ結果、現在では埼玉県の中でも出荷額第3位の「工業都市」である。川越市の工業化は、戦後、高度成長期から、当時農業県であった埼玉県において、川口市を中心として同心円状に、また、主要道路に沿って放射状に、京浜工業地帯の外延的拡大が進行していく中でおこったものである。そして、このような、川越市を含めた埼玉県の戦後の工業化の中心となったのは、組立工業系の業種の工場であった。

前述したように、川越市は、城下町から発達し、商業都市として栄え、現在でも川越市の商業の中心である旧川越市と、その周辺の農業地帯であった旧9か村から成り立っているのであるが、戦後、川越市に進出した工場の多くは、既成市街地から離れたところ、新市域に立地していった。従って、川越市においては、川越市の伝統的な業種である、菓子、煎餅、素麺等を製造する食料品工場や桐箆笥等を製造する家具工場は、戦前から商業の中心地であり、物質の集散地、加工基地と

して栄えていた旧川越市の旧市街地に多く分布しているのに対し、戦後、その多くが、工場の発展とともに、工場の拡張のための用地を求めて、東京都区部から移転してきたと考えられる自動車等の機械或いはその部品を製造する組立工業系の業種の工場は郊外に多く分布しているのである。特に工業団地の造成は郊外の新市域に行われ、川越市の中でも比較的規模の大きい工場は主に工業団地に立地している。

また、戦後に行われた工業団地の造成は、川越市の工業化に大きな貢献をしたのであるが、その造成の目的には変化がみられる。戦後の川越市の工業化の初期にあたる昭和30年代に計画された川越狭山工業団地は、首都の過剰な人口と産業を再配置するという首都圏整備法下において、その当時は、地方農村都市であった川越市が「工業都市」として発展するため、工場を誘致するために造成されたのであるが、工業化がある程度進展した昭和40年代後半から造成された川越工業団地は、川越市を含む埼玉県南部の、早い時期に工業化が進展し、人口増加が著しい地域における、市街地に混在する工場の再配置を促進し、市街地の住民の生活環境の改善を図ると同時に、企業の産業活動を発展させるために造成されたのである。川越市では、新市街地において住工混在という現象が生じてきた他に、戦災を被らなかったために未だに城下町特有の形態を留めている旧市街地においては、道路が狭隘で屈折が多く交通事情が悪い等の問題もあったため、この川越工業団地には川越市内からも工場が移転してきているのである。

このように、戦後の川越市の工業化には、川越市が戦前からの商業の中心地であった旧9か村から成り立っていること、また、川越市が都心から40km圏に位置し、首都に近接していることという川越市の特性が影響しているといえよう。